

TAT における時間制限の効果について

——敵意場面を用いて——

堀 口 美 津 子

Effects of Time Pressure on the Cards of High Hostile Value of TAT

HORIGUCHI Mitsuko

1. 問 題

① 投影法における「投影」概念

「投影する (project)」という言葉は元来「映し出す」とか「自分の感情、観念、想念などを外界の实在物に投射する、客体 (客観) 化する」という意味がある。

精神分析では防衛機制の一つとして用いられた。Freud, S, (1896) は、それを次のように述べている。「投影は人間の持つ願望、感情などを他者や外界に帰する傾向である。それは、それらの願望、感情が自己の一部であることに気付かないように自分を防衛する一つの方法である。」この考え方は、元来の意味に近いが、投影法での「投影」は、それとは意味が異なっている。Murray, H, A, (1951) は、Freud のいう「投影」概念が、投影法でのそれを混乱させているとして、Freud の概念を以下のように整理した。1. 患者は本当は他の人間に実際にはないものがあると信じている。2. 投影者は自分又は他人に向けた自分の感情を被投影者のものだと考えてしまう。3. 実際はその傾向は投影者の人格の一部である。4. 投影される部分は投影者が受け入れられないものであって、抑圧されて彼は自分の中にそのようなものがあることを知らない。5. 投影の目的は自己評価 (self-esteem) を高く保つことである。

Murray は投影法での「投影」は、この Freud 的投影のみでなく、抑圧されていない、時に価値があるとされている人格の部分が含まれると述べた。

Frank (1919) も又、「投影法とは、非構造的な刺激状況を被験者がどのような仕方で解釈し、意味を与え、体制づけてゆくかを知ることから、彼固有の体験のあり方について洞察を得る方法であって、投影によってはじめて被験者は“自ら語りえない、もしくは語ろうとしない”自らの私的世界をあらわにすることが可能である。」としている。このように Murray や Frank が述べた「投影」は、Freud のそれよりも意味が広がっている。

次に、その「投影」が可能になる条件であるが、二人は非構造的な刺激状況を与えさえすればよいと信じているように見える。たとえば、Murray (1938) は、TAT での空想物語から人格を把握できるという仮説として、“人は客観的な事実を説明しようと熱中してくると自分自身のことや、他人の詮索の目には気がつかなくなり、自分を防衛しようという関心がなくなる。そしてそこで素直に語られた空想的物語の内容には、語り手の経験や考えなどが意識的、無意識的に

多く表現されることになる。”と述べている。このように彼等は、曖昧な課題を与えれば、人は空白のスクリーンに向かって、その上に彼の主観をそのまま投影するのだと考えているように見受けられる。

しかし、そのような考え方は、その後修正され、たとえば、Schachtel, E.G. (1960) が、きわめて適切にロールシャッハ・テストについて述べているように、投影反応は“あるテスト状況における刺激との出会いであり、その出会いの体験なり、それに対する反応”なのである。

② 投影法における自由状況の意味

ここで、McFarlane と Tuddenham (1951) により、投影法の仮定を整理すると、1. テスト場面での行動は他の状況での行動や人格を反映する。2. 投影法は自発的な反応を保障する。何がよりよいかわからないので「装う」ことがない。3. すべての行動の基盤には基本的(basic)な人格がある。外的世界では外部圧力で変形するが私的世界では明らかとなる。

このような仮定を保障する要素は、曖昧刺激であり、施行場面での自由状況である。自由状況には二つの要素が考えられる。一つは、反応内容の自由である。刺激が曖昧で反応に正誤がないし、テスターも反応内容を評価しない。この反応内容の自由があってはじめて現実場面では外部圧力によって変形してしまい明らかにならない内的枠組が明らかになるはずである。しかし、それだけでは充分でなく、もう一つの要素の時間の自由が必要である。

多くのテストははじめ知能テストのような標準化されたテストであった。投影法も、たとえばロールシャッハ・テストは知能の機能の実験的研究の歴史を持っているし、曖昧な性質をもった絵は Binet と Simon (1905) によって、文章完成法は Ebbinghaus (1897) や、Ziehen (1923) によって、知能の測定の方法として用いられてきた。しかし、これらの方法が人格の測定に用いられるようになってから、知能テストやアチーブメント・テストに要求されるような厳格な枠組が崩れてきたのである。又、投影法の始まりともいえる言語連想検査は Jung の方法では時間を制限しないことになっているが、実際は時間を測るのであるから被験者は急いで反応するし、Kent-Rosanoff の方法では頭にうかんだ言葉を言うように求める。又、同じ言語刺激を用いる文章完成法テストや P-F スタディでも、頭で思いうかべたままに、あまり長い時間をかけずに筆記するように教示する。このように、言語刺激を用いる投影法では時間要因が制限されている。これは自由状況の中で反応を求める投影法の中では異質である。時間制限がなされるのは、言語という公共的で意識の産物である刺激を用いるので、時間を長くかけると被験者の「私的世界」を離れ、公共的反応が出現するためであると考えられる。つまりこの場合には、時間を制限する方が検査の目的に適うと考えられている。

以上の言語刺激を用いた検査は、どれも全人格的な投影法ではなく、単独で診断に用いられることはない。歴史的にも、言語刺激を用いる投影法の限界を乗り越えるために、より曖昧さの高い非言語刺激が用いられるようになり、より多面的な人格の診断が可能になってきたのであるが、その過程でより一層の自由——被験者の行動の仕方を限定しないこと——が必要となってきたのである。そこでは被験者に曖昧な刺激を準備し、退行をはらんだいくらか幅のある意識水準での知覚、意味づけ作用を促す。「被験者¹⁾は、新奇で不明瞭なそして様々な感情負荷を潜在させている刺激と出会いながら、経験の内在化を通して蓄積している彼自身の精神内界のイメージや

概念をその図版刺激と相互適合 (fitting together) させようと試み、そのようにして被験者なりに仕上げた統覚産物を“反応”として検査者に伝える。」

以上のように投影法の歴史の中で、言語でない曖昧刺激を用いる時に、時間の自由は不可欠となってきたのである。その自由は、ロールシャッハ・テストのように全くの自由が許されている場合や、TAT のようにある範囲内 (5分程度でできる物語) での自由もある。つまり、時間の長さを決定する枠組は内的なものであれ外的なものであれ、そこでの自由は時間の使い方を指定されないという自由なのである。そして、TAT の教示でも「5分程度で…」というのは、時間を制限しているよりは、5分位できる物語を作ればよくてそれ以上の複雑さ高さを求めていることを示すものなのである。以上のような時間の自由は、心理臨床場面での時間の自由に非常に似かよっており、きりのある使い方を自由にまかされた時間であるが故に、現実場面から区切られ、又、人は又現実場面に戻ってゆけるのである。

③ 投影法に対する時間制限の効果の研究

時間制限の効果の研究は Weisskopf (1942) によって始まった。Siipola と Taylor (1952) はこれを発展させ、ロールシャッハ・テストの反応内容の施行状況での変化を研究した。その結果、自由条件 (以下 F 条件と略す) のもとでは M 反応が多く、時間制限条件 (以下 L 条件と略す) のもとでは、診断的に重要とされる C 反応と c 反応が多かった。彼等は「L 条件下では強迫的に素早い反応がなされるから人格の未統合で傷つきやすい部分が反応にあらわれる。それは自我に承認されにくく人格の『最悪の』反応である。それに対して F 条件下では、人は知的情緒的な弱さを防衛するために引き伸ばしや選択という方法を用いることができるので、自我の統制と承認を受けた『最良の』反応が得られる。」と説明している。

その後、Siipola (1955) は、言語連想検査 (Kent-Rosanoff List から25項目) で同様の研究を行なった。その結果は、F 条件下では反対語が減少し、形容詞が名詞に変化する割合が高くなった。しかし、L 条件下では、逆に形容詞は品詞を変えず反対語になる率が高く、反応拒否も多かった。L 条件下では反応が刺激本位 (object-bound) になると説明されている。又、F 条件下でも速く反応する被験者の反応内容は L 条件下の反応に類似していた。又、それらの被験者は MMPI でのアブノーマル・スコアが高かった。このように課題解決の態度を時間の枠組が左右するとともに、自由条件下では時間の用い方に内的な枠組が動くことがわかる。

Siipola (1968) は、文章完成法テストに対しても、女子大生を用いて時間制限の効果をもっている。まづ両条件下で施行後、反応を被験者と第三者に自分らしい (又はその人らしい) 反応 (self-reference score) か否かスコアさせた。その結果 L 条件下で自分らしくない反応が多かった。又、同一被験者に3週間後に F 条件下で施行すると、不安の高い被験者は self reference score の差が大きかった。Siipola はこれを「F 条件下では、被験者は自分の反応の質に対し個人的な責任を感じるので、高度の自己意識の調節過程が動く。そのため注意深い選択と検閲を通して他人に見せてもよいと考える自己承認的な情報を提供する。しかし、L 条件下では、教示で初めに頭にうかんだ反応を自動的に報告するように言われるので個人的な責任を感じない。そのため反応過程は意識的な統制と選択から自由になり望ましくない情報——意識していない願望や感情や動機を表現する。」と説明している。

さらに Fiester と Siipola (1972) は、TAT の敵意場面を用いて、同様の研究をした。高い敵意価 (hostility values) をもつ TAT カードが攻撃的空想を引き起こすが、その空想は正常な禁止を伴うため、そこに接近回避葛藤がおきると考え、時間制限により葛藤解決のための成熟のレベルが低くなると考える。そしてその成熟のレベルを検討するために「攻撃のマネージメント」(management of aggression) という概念を用いて、葛藤解決を4つのタイプに分けている。それは、Ⅰ. 統制された攻撃 (controlled expression of aggression) Ⅱ. 攻撃の防衛的表現を伴う過剰統制 (overcontrol with defensive expression of aggression) Ⅲ. 攻撃の回避を伴う過剰統制 (overcontrol with avoidance of aggression) Ⅳ. 統制されない攻撃 (uncontrolled expression of aggression) の4タイプである。Ⅰ. が最も成熟度が高く、順次低くなる。実験はL条件(時間は3～4分で第一印象で書くように指示)、N条件(5～6分を与え、反応スピードに関しては言及しない)、F条件(7～8分を与え好きなだけの時間を使うように指示)の三条件で、結果はL条件下でタイプⅣが有意に多かった。又、F条件下でも速く反応する被験者があり、初発反応時間とEMスコア(タイプ別に得点をつけ成熟度の指標としている)の相関が+.37であった。彼等はTATのテスト場面を公共的な対人的場面にとらえ、そこで被験者が用いる統制を現実での行動に近いものと考えている。そして時間制限はその統制を乱し、人格の最も傷つきやすい部分、「最悪の」部分が現われるのだと言う。

しかし、前節で述べた“投影法施行の自由状況”の意味から考えると、Siipola等の考えには次のような難点があると考えられる。

- (1) TAT 施行場面は、テスター・被験者関係に左右されるとはいえ、心理臨床場面に近い性質を持つ一定限度の自由を保障された場である。現実場面での葛藤解決の方法がそのまま持ちこまれると考えるのは単純にすぎる。過去における研究でも、TATと現実での攻撃行動に負の相関があるとするもの (Feshback, 1955; Lesser, 1958; Schafer & Norman, 1967; Matranga, 1976)、正の相関があるとするもの (Mussen & Naylor, 1954; Kagan, 1956; James & Mosher, 1967)、関連がないとするもの (Coleman, 1967; Murstein, 1968) などがあり、二つの間に一義的な関係があるとはいえない。
- (2) 第二の前提として、時間制限を加えても敵意価の高い図版は一樣に攻撃性を引き起こすという考え方がある。故に敵意価の高い図版で攻撃性が回避されて表現されていない場合に、攻撃性が喚起されているのに過剰統制が働くと仮定している。一樣に攻撃性が喚起されていて、時間制限はその統制を乱すというのであるが、反応形成に対する時間を主とした自由状況の役割から考えると、攻撃性が一樣に喚起されていることに対して疑問が残る。
- (3) 攻撃性の統制方法に価値付けをおこない最悪の、最良のというのは客観的でない。客観的に反応のレベルを測定する必要がある。

2. 目 的

問題で述べたように先行研究では、敵意価の高い図版は一樣に攻撃性を喚起するので、もし時間制限をすると人は現実場面で用いる攻撃性の統制を乱し“最悪の”反応を産み出すと結論している。

しかし、本研究では質問紙により自己の攻撃性の認知の高低を知り、その高低と時間制限の効

果の関連を研究する。又、TATの反応のレベルを質問紙によって推定し、攻撃性の喚起とそれへの統制の結果としてのTATの反応への時間制限の効果を探索的に研究する。

3. 方 法

＜対象＞ 東京都内の私立高（女子のみ）高校生2年生95名

＜TATの施行＞ スライド映写による集団式施行で、被験者各自に筆記させる。記入用紙は反応量を被験者の自由にまかせるため、図版1枚につきB5版の白紙1枚。TATはHarvard版の12F, 6BM, 4, 9GF, 13MF, 18GFの計6枚をこの順序に提示する。Murstein等(1961)による敵意価の最も高い図版からの6枚であり、Siipola等の研究で用いられた。敵意価の低いものから高い順に並んでいる。これらの図版には2人の人物が描かれており、そのうちの少なくとも一人は女性である。

施行は53年10月。

教示は、自由施行群（F群56名）、制限施行群（L群49名）ともに「これから6枚の絵をお見せしますから、1枚毎に一つづつ物語を作ってください。その絵はどういう場面なのか、どうしてそうなったのか、又最後にどうなるのかを書いて下さい。正しい答えはありませんから思った通りを自由に書いて下さい。これは成績にも関係ありません。先生にもお見せしません。」と述べる。

L群にはその後続けて「3分しか時間がありませんから、できるだけ速くはじめに思いついたことを書いて下さい。」と言い、1分毎に時間の経過を知らせる。

F群には「6～7分で書き終わる程度に書いて下さい^o。」と言い、6分半程度で終了する²⁾。

＜TATの結果の整理＞

初めSiipola等にならい四つのタイプに分類しようと試みたが、I, IIの差が明確でなく、又攻撃性を発現した場合に、行為の着手の有無、結果の発生の有無、covertな攻撃の発現も重要と考えられるので、以下のスコアを与えた。Lesser, G.S. (1958)の研究で、TATで発現された攻撃に伴う不安をスコアする方法として、内容の類したのを用いている。攻撃的行為の叙述に関し行為の着手の有無、結果の発生の有無を分け、行為の質に関し直接的（殺人、暴行、傷害、言語的攻撃、精神的攻撃など）と、間接的（病気、病死、事故など）に分ける。又、行為の主体は主人公であるか否かを問わなかった。これは、TAT物語にあらわれるすべての人物、あるいは事象が語り手の内界の色々な側面を表現していると考えて、物語の登場人物すべての攻撃的行為、すべての攻撃的事象をスコアしたためである。

(Do), oD, Do, (oA), (Ao), (oAo), oA, Ao がタイプ I, II に、Av, rejection がタイプ III, A, $\widehat{AA}$, $\widehat{AA}$, AAA がタイプ IV にあたると考えられる。

スコアの信頼性を保障する為、京都大学教育部臨床心理学専攻博士課程の学生一名に全物語数570個の内114個のスコアリングを依頼し、筆者と互いに独立にスコアした結果、86.0%の一致をみた。

スコアの得点化は、Av, (Do), oD, Do の4個は攻撃性回避スコアとし、回避得点を4, 3, 2, 1とつけた。被験者毎に6枚の図版の回避得点を合計した点の範囲は理論上0～24であり、

表1 TAT の反応の攻撃性発現, 善避スコア

内容 スコア	攻撃性の質		行為, 出来事 の発生		結果の発生		攻撃性発現への抑止, 葛藤, 後悔 etc.
	直接的	間接的	無	有	無	有	
Av							—
(Do)	○	○		○	○		病院, 医者に行く, 看護
oD	○		○		○		他者の抑止, 対象の逃亡, 行為者の葛藤
Do		○		○	○		対象の抵抗, 失敗, 和解
(oA)		○		○		○	結果発生以前に看護, 救助
(Ao)		○		○		○	結果発生以後に看護, 悲しみ
(A)				○		○	—
A	○			○		○	—
oA	○			○		○	行為, 結果の発生以前に他者の抑止, 対 象の抵抗, 行為者の葛藤
Ao	○			○		○	結果発生以後, 行為者の自責, 後悔, 罪 悪感, 他者の悲しみ
AA	A に対して, カウンターの A						
AA	A に対して, 自責の A						
AAA	AA, AA に対してカウンターの A, 自責の A が起きる						

AA, AA, AAA には, 攻撃性発現への抑止, 葛藤が伴われる場合がある。

実際は 0~20, Mdn は 8 であった。(oA), (Ao), (oAo), A), A, AA, AA, AAA を攻撃発現スコアとし, 発現得点を 1, 1, 1, 2, 2.5, 3, 4, 5 とつけた。理論上は 0~30 の範囲で, 実際は 0~21 に分布し, Mdn は 9 であった。

<質問紙>³⁾

現実場面での攻撃的反応に関する意識カテゴリー (攻撃的反応カテゴリー) 10 項目 (例; あたりちらししやすい方である), 攻撃性の残留感の意識に関するカテゴリー (攻撃性残留感カテゴリー) 13 項目 (例; くやしさがいつまでも残る), 攻撃性格に関するカテゴリー (攻撃的性格カテゴリー) 10 項目 (例; 意地っ張りである) の合計 33 項目からなる。予備実験を経て筆者が作成したが, 信頼性, 妥当性の検討はしていない。

施行においては“現実のありのままの自分”と“こうありたいと思う自分”の二側面について同時評定を求める。評定形式は「全然そうでない」「どちらかといえばそうでない」「どちらでもない」「どちらかといえばそうである」「全くそうである」の 5 段階評定で, スケール上に一応 5 段階目盛りを付しているが, 目盛り以外のどの位置にも自由に評定でき, ただ中央点はできるだけ避けるように教示した。

<質問紙の結果の整理>

1. “攻撃性認知” 評定値 (SC 値) の算出各カテゴリーを通じて, 自らの攻撃性の認知からみた正負の方向によって, 正の側の評定で, 中央点から一つ目の目盛りまでの評定を 1. 一つ目から二つ目の目盛りまでの評点を 2 点として, 合計点 (SC 値) を出す。但し, この場合正負の意味方向に割り切ることが難しい 7 項目は除外した。したがって SC 値の得点範囲は理論上は 0~52, 実際は 0~31 に分布し, Mdn は 14 であった。

2. SC 値の高低により HC 群, LC 群に分けた。SC 値が 17 以上を HC 群 (F 群で 19 名, L 群

—18名), 11以下をLC群 (F群で15名, L群で19名) とした。

4. 結果と考察

a. 時間制限の効果 (表2)

全体として群とスコアの間に関係があるといえない。 $\widehat{AA}$, $\widehat{AA}$, $\widehat{AAA}$ を一項目にまとめ, 全部で10項目とし, χ^2 検定の結果, 有意差はなかった。タイプ III にあたる $\widehat{A}$, $\widehat{AA}$, $\widehat{AA}$, $\widehat{AAA}$ の合計は傾向として差があり, F群の方が多い。さらに $\widehat{AA}$, $\widehat{AA}$, $\widehat{AAA}$ の合計をとり群差をみると有意であった ($\chi^2=8.11$, $df=1$, $p<.005$)。即ち, タイプ IV や, さらに攻撃の発現度の高いスコアはF群の方が多い。

表2 F, L 2群における発現, 回避スコア内容¹⁾

スコア	群	F	L	スコア	群	F	L
Av		85	95	A		48	53
(Do)		9	10	$\widehat{AA}$		29	19
oD		4	4	$\widehat{AA}$		13	10
Do		15	12	AAA		8	0
(oAo) (oA) (Ao)		23	36	rejection		3	4
(A)		9	8				
oA, Ao		30	43	計		276	294

(注) (oAo) は (oA)(Ao) に, oAo は oA, Ao に, DoA,(A)A は A に, (A)(A) は (A) に含めた。

b. 攻撃発現からみた攻撃性認知の高低と時間条件の関係 (表3, 図1)

HC群は, F群で9.40, L群で9.69, LC群はF群で10.90, L群では7.0であり, 分散分析を行なったところ, 5%の危険率で有意差があり, 攻撃発現得点において, 時間条件と攻撃性認知の間に関連があった。

L群ではHC群の発現得点が高い傾向があり (10%レベルの危険率の差), F群ではLC群の方が発現得点は高いが有意差はなかった。

表3 攻撃性認知と時間条件からみた攻撃発現得点

時間条件 による群 攻撃性認知 による群	Free			Limited		
	平均	(Mdn)	Range	平均	(Mdn)	Range
HC	9.40	(9)	3—16.5	9.69	(10)	1—21
LC	10.90	(9)	0—20	7.0	(7)	1—14

群 間 差

HC-F/HC-L	LC-F/LC-L	HC-F/LC-F	HC-L/LC-L
N. S	*	N. S	$p<.10$
$t'=.23$	$t=2.72$	$t=1.08$	$t=1.82$
コクラン検定	$df=32$	$df=32$	$df=35$

* $p<.05$

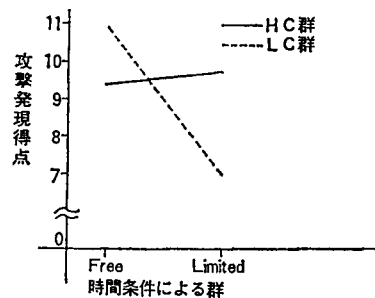


図1 攻撃性認知と時間条件からみた攻撃発現得点

即ち、時間制限をすると、質問紙と同方向の結果が生じ、時間条件が自由になると、質問紙と関連のない結果が得られる。又、攻撃性認知の低い群は、時間を制限されると攻撃性発現が押さえられ、認知の高い群は時間条件に左右されない。

c. 攻撃回避からみた攻撃性認知の高低と時間条件の関係（表4、図2）

HC群は、F群では9.0、L群で7.94、LC群はF群で7.07、L群では10.34であった。分散分析では10%レベルの危険率で交互作用が傾向としてあった。回避得点は発現得点ほど敏感に二つの要因の影響を受けない。

表4 攻撃性認知と時間条件からみた攻撃回避得点

時間条件による群 攻撃性認知による群	Free			Limited		
	平均	(Mdn)	Range	平均	(Mdn)	Range
H C	9.0	(10.0)	1—20	7.94	(6.5)	0—20
L C	7.07	(8.0)	0—20	10.34	(16.0)	0—16

群 間 差

HC-F/HC-L	LC-F/LC-L	HC-F/LC-F	HC-L/LC-L
N. S	p<.10	N. S	N. S
t=0.60	t=2.03	t=1.11	t=1.46
df=35	df=32	df=32	df=35

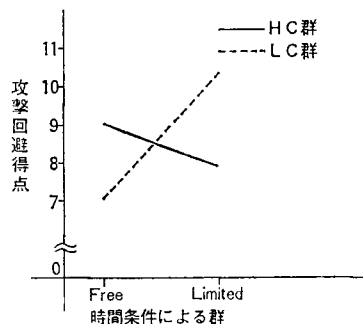


図2 攻撃性認知と時間条件からみた攻撃回避得点

d. さらに詳しく変動をみると、LC群は回避得点と発現得点が表裏の関係にある。しかし、HC群は自由条件下の方が回避得点が有意差はないが高くなっており、発現得点ではほとんど変動がなかったのと微妙な対比をみせている。

そこで回避反応 (Av) の内容をみた。すると HC群は L群でネガティブな感情 (別れ、悲しみ、失敗) が1/3~1/4を占めるのに対し、F群では約1/6に減少し、逆にポジティブな感情 (依存、救助、協力、care、親和的気分、再会)、支配、性、恋愛などのテーマが全体の1/3から3/5に増加している。攻撃性認知の高い者は自由条件下で能動的な気分をテーマにすることで攻撃を回避している。

それに対し、LC群は時間制限下でネガティブな感情をテーマにするものが Av の1/3を占めるのに対し、自由条件下で1/8に減少する。b. の結果のように、攻撃性認知の低い者は時間制限をされると攻撃の発現が押さえられるが、それは別れとか悲しみとかネガティブな感情表現に留まり攻撃の発現にまで至らないためと推測される。

a. の結果のように、先行研究とは異なっている。つまり、時間制限をされるとむしろ攻撃性の発現が押さえられる傾向がある。先行研究では喚起された攻撃性の統制が時間制限によって乱されると言っているが、それでは説明がつかない。ところが b. c. の結果でわかることは、自己の攻撃性を意識している程度によって時間条件の影響が異なることである。意識程度が高い者は時間条件に左右されにくい、低い者は左右されやすく、時間制限されると、意識レベルに近い反応しか産み出せなくなる。時間の余裕があってはじめて意識レベルで計られる水準とは異なったレベルの反応が得られる。

堀口：TATにおける時間制限の効果について

それに対し、意識レベルで自己の攻撃性を認知している者は、時間条件の影響は受けにくい、それでも喚起された攻撃性の操作のスキルが若干変化している。時間に余裕がある間にさらに反応に加工が加わる。そこにその人独自のものが表現されるのであろう。

時間制限をされた時、攻撃性認知の低い者にどの程度攻撃的イメージが喚起されているかは、又別の研究にまたねばならないが、少なくとも以上の結果からは、TATの敵意価の高いカードが一樣に攻撃的イメージを喚起するのではないことは推測される。

又、自由条件下では質問紙での攻撃性認知とは無関係な結果が示され、質問紙では測定できないレベルをTATの反応が示していると考えられる。Siipola等のように、TATで用いられる葛藤解決方法が現実場面でのそれに近いとは考えにくい。

ここで再度b, cの結果をふまえて先行研究と本研究の結果の差を考えてみたい。両研究には、施行方法の差（個人法—集団法、指定記述—自由記述）、被験者の差（女子大生—女子高生）、被験者・テスター関係の差（教師対学生—利害関係なし）、被験者の属す文化の差がある。b, cの結果から攻撃性の自己認知が時間制限の効果と関連があることがわかったが、そうだとすると文化の差が異なる結果を招いたと考えられる。即ち、アメリカのように攻撃的であることがactiveであるとも受けとられる文化的風土の中では、人は自分の攻撃性を受容しやすく、自己認知もすすんでおり、又TATの敵意価の高い図版をみても当然のように攻撃的イメージを持つ可能性が高い。それで一樣に攻撃性が喚起され、時間の余裕のある場面では教師—学生という関係上適正な統制が用いられるのであろうか？

投影法において、日米でこのように時間制限の効果に差があることから、時間制限をされた時の攻撃性をめぐる葛藤解決の方法に差があることが推測される。もとより、現実の行動と投影法での反応は異なるのであるが、後者で示されるような攻撃的イメージの喚起と統制は、現実の行動の裏にあってそれに影響を与えているからである。

心理臨床場面に戻って考えると、現実的な課題や緊張の有無によって内的イメージの産出が左右されるということで、クライアントのレベル（神経症レベルか精神病レベルか）や、その人の衝動の認知の度合によって現実的な課題や緊張の程度を調整する必要性が示唆された。

○

- 1) 斉藤 (1979)
- 2) 予備実験の結果、時間条件を付さないとこの程度の時間が必要であった。
- 3) 堀口 (1980) 参照
- 4) 堀口 (1980) 参照

引用文献

- Binet, A. & Simon, T. Application des méthodes nouvelles au diagnostic du niveau intellectuel chez des enfants normaux et anormaux d'hospice et d'école primaire, *Anée Psychol*, 1905, 11, 245~336
- Coleman, J. D. Stimulus factors in the relationship between fantasy and behavior, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 1955, 50, 3—11
- Ebbinghaus, H. Über eine neue Methode zur Prüfung geistiger Fähigkeiten und ihre Anwendung bei Schulkindern, *Z. Psychol. Physiol.*, 1897, 13, 401—459.
- Feshback, S. The direct reduction function of fantasy behavior, *J. Abnorm. Soc. Psychol.*, 1955, 50,

3—11.

- Fiester, S. & Siipola, E. Effects of time pressure on the management of aggression in TAT stories J. Pers. Assess., 1972, 36, 230—240.
- Frank, L. K. Projective methods for the study of personality, J. Psychol., 1939, 8, 389—413.
- Freud, S. Further remarks on the defense neuro-psychoses (1896), Collected papers, vol 1. London Hogarth Press, 1950, 185—182.
- 堀口美津子 青年期女子における攻撃性の認知と TAT との関係, 京都大学学生懇話室紀要, 1980, 10, 82—91.
- Kagan, J. The measurement of overt aggression from fantasy, J. Abnorm. Soc. Psychol., 1956, 52, 390—393.
- Lesser, G.S. Conflict analysis of fantasy aggression, J. Pers., 1958, 26, 29—41.
- Matranga, J. T. The relationship between behavioral indices of aggression and hostile content on the TAT, J. Pers. Assess., 1976, 40—2, 130—134.
- Mc. Farlene, J. & Tuddnenbam, R. D. Problems in validation of projective techniques, in Auderson, H.H. of Anderson, G. L.(eds.) An Introduction to projective techniques, Prentice-Hall, 1951, pp. 26—54.
- Murray, A. H. et, al. Explorations in Personality, New York Oxford Univ, Press, 1938 (外林大作訳, パーソナリティ I, II, 誠信書房, 1962)
- Murray, A. H. in Anderson, H. H. of Anderson, G. L. (Eds.) An Introduction to projective techniques, Englewood cliffs, N. J., Prentice-Hall, 1951, xi—xiv.
- Murstein, B. I. The effect of stimulus, background, personality and Scoring system on the manifestation of hostility on the TAT, J. Consult. Clin. Psychol., 1968, 32, 355—365.
- Murstein, B. I., David, C., Fisher, D., & Furth, H. G. The scaling of the TAT for hostility by a variety of scaling methods, J. Abnorm. Soc. Psychol., 1961, 25, 497—504.
- Mussen, P. H. & Naylor, H. K. The relationship between overt and fantasy aggression, J. Abnorm. Soc. Psychol., 1954, 49, 235—240.
- 齊藤久美子 ロールシャハ反応の自由再生一通カード結果の形式分析一, 京都府立大学学術報告, 昭和53年, vol 30, 39—51.
- Schachtel, E. G. Experimental foundations of Rorschach's test, Basic Books, New York, 1966 (空井健三, 上芝功博訳, ロールシャハ・テストの体験的基礎, みすず書房, 1975)
- Schafer, J. B. & Norman, M. Punishment and aggression in fantasy responses of boys with anti-social character traits. J. Pers. Soc. Psychol., 1967, 6, 237—240.
- Siipola, E. S. & Taylor R. Reactions to ink blots under free and pressure conditions, J. Pers. 1952, 21, 22—47.
- Siipola, E. Incongruence of sentence completions under time pressure and freedom, J. Proj, Tech, Pers, Assess., 1968, 32, 562—571.
- Siipola, E. Task attitudes in word association, projective and non-projective, J. Pers., 1955, 23, 441—459.
- Weiskopf, E. A. The influence of the time factor on Rorschach Performance, Rorschach Res. Exch., 1942, 6, 128—136.

<本研究科博士後期課程>